

編集室から

このニュースを発行して直ぐまた、東北へ向かいます。岩手県遠野市と陸前高田市。民話の故郷として有名な遠野市は、沿岸部の幾つかの街からほぼ1時間という交通の要所として栄えた街です。この為、三陸沿岸部が被災した場合は、後方支援拠点としての役割も担ってきたそうです。そして、今回も...

自らは直接被災しては居ないものの、後方支援の役割を期待され、多くの被災民が避難をしてきたこともあり、また異なった災害対応をされているようです。

今回、遠野市の地域づくりカリスマ菊池新一さんのご支援を頂いての、復興支援です。石川地域づくり協会として県庁・能登の市町職員、我々コーディネータや塾生で、陸前高田市のある仮設住宅へ能登の大鍋を振舞いに伺います。

4年前の能登半島地震の際、かねてより交流のあった沖縄県地域づくりネットワークから多大な応援、義捐金を頂戴いたしました。長くその用途を考えあぐねていたのですが、協会として、より大規模な東日本大震災の応援に充てる事になり、沖縄の産品も持参致します。

沖縄の青年と能登の娘との悲恋の神話が双方に伝承されています。古来、能登は日本列島各地との交流の中継ぎをする地域だったのかもしれない。その能登を通じて、沖縄のみなさまの心を岩手に届ける...。有難いお役目です。

遠野には、東北道を北上し花巻から東進します。餅の一関、奥州平泉などを経て走る北上川と平野と山並み。黄金に染まる賢治の故郷の眺めが心に焼き付いています。一帯は、この地の野太い豊かさを感じる風景が続く素晴らしい土地で、本当はのんびり立ち寄りた地域です。

山形新幹線沿線の温泉地には、週末満館となる処も出てきたようですが、庄内・秋田・青森は如何でしょうか。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2011/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2011/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

神意月



福岡県太宰府天満宮にて
登竜門伝説：龍となる鯉に乗る天神さま
by hama

負けるな東北！
忘れるな日本！

東北へ旅に出かけて
復興を応援しよう！

寄稿『共感を得るソーシャルメディアの活用法』

(株) H2O 代表取締役 加茂谷 慎治

映画「フォレスト・ガンプ」を憶えておられるだろうか。第六十七回アカデミー作品賞を受賞したトム・ハンクス主演のアメリカ映画である。この中で、ガンプが一人でひたむきにアメリカ大陸を走って横断する姿を見た多くの人が伴走し、集団の輪が広がっていったシーンがあった。

ジャーナリストの藤代裕之さんは、自著の中で、ソーシャルメディアを通して投稿が広がっていくさまをこのシーンに例えている。投稿が共感を呼び、投稿者の人間性が評価をされるといつしかその輪はひろがり、多くの人につながり、情報は拡大していく。まさにガンプの姿はソーシャルメディアと相通じるものがある。

ソーシャルメディア全盛である。ツイッターに始まり、フェイスブック、そしてGoogle+プラスまでが加わり、ネットワーキングによる情報伝達、コミュニケーションが活発に展開されている。ソーシャルメディアを活用するということは、誰もが瞬時に世界に向けて情報を発信するメディアを持つことができる。「情報の飛び道具」を手に行ける反面、ソーシャルネットワークというとつもなく広大で奥深い世界に、利用者自身が放り出されたようなものである。

広大な荒野でどんなに大声で叫んでも誰も返事

濱のつばやき 『力を超えて』

元リッツカールトン日本支社長で、現在「人とホスピタリティ研究所」代表として全国的に活躍されている高野登氏から、二ヶ月ほど前、メールを頂戴していた。「絶対にお奨めの一冊」とこ推薦を頂いた書籍は直ぐに取り寄せたものの、中々読めず積読になっていった。

先月は台風十二号一過に被災地奈良天川村を訪れ、娘を米国留学に送るなど、気ぜわしい日々を送っていた。そんなある日、ふと同書が目に入り、読み始めた。著者は、初めてのホテル就業で、いきなり支配人に任じられた。が、なんとそのホテルは新宿歌舞伎町にあり、ヤクザが常泊。荒れていた。

いきなり恫喝の洗礼に遭うも怯まず、以後徹底して人としての正義を貫き、震え怯えきっていたスタッフを守りきるだけでなく、遂に完全に安全な環境へと再生を果たし、それは伝説と言われている。

小柄な女性が、丸腰で渡り合う…。何度も絶体絶命を覚悟したという。その度にまるでTVドラマのように警察が駆けつけ、救われたらしい。ヤクザと闘う警察も、彼女の無手勝流を心配し密かに警護してくれていたことは、街の浄化後に、知ったそうだ。

無理難題を吹っかけるのは、現代において何も非法な連中ばかりではない、という。満室の夜、廊下

をしてくれないのと同様に、ソーシャルメディアの世界では、どんなに数多く投稿してもその中身に共感を得られなければだれも反応してはくれない。記者の手が入り、編集者がレイアウトする新聞や、カメラマンがたくみにカメラワークを活かすテレビとは異なり、発信者自身の文章力と人の心を動かす共感が問われるのである。

ソーシャルメディアでは、友達を増やす方法や、エッジランクと呼ばれる親密度を高めるテクニクばかりがもてはやされている。顔の見えないつながりだけに、機能や発言力を高める前に、自分自身をいかに表現するか、ブランディングをどう高めるかをもう一度点検してみたいかがだろう。自分自身を振り返ってみても今、ともに仕事をしている人や感銘を受けた人たちとの出会いがソーシャルメディアからということも多い。

自分のブランドを確立し、多くの人とつながり、共感者を増やして情報発信力を高めることは、あなた自身を高いステージに導いていくことにもなるのである。



【プロフィール】

(かもや しんじ)金沢生まれ。新聞社を経て、二〇〇八年デザイン総合プロデュース会社「エイチツーオー」をデザイナーと共設立。企業・団体・商店街等の広報コンサルティングやイベント企画等を展開。(公財)全国法人会総連合広報委員。

を通る酔客が喧しいから部屋換えをしろというクレームに、彼女は一晚中廊下に立ち、酔客を注意すると約束する。一日立ち仕事をした後のそれは難行・苦行であつたらう。がしかし、彼女はほんとうに徹夜で実行した。ここまでされると居たたまれなくなるのは、無理難題客の方になる。

彼女は、『怒鳴られたら、やさしさを一つでも多く返す』事を身を以って実践したただけだという。それは、わが身の病も省みず町医者として往診先で倒れ帰らぬ人となった父親の教えであった。

頭や理屈では判っていても、決して貫き通せるものではない。彼女の精神の深い処で揺ぎ無く天に届く柱のように立つ「人間への深い理解と信頼」が、それを支えているのではないか。

これは、ノウハウ本ではない。むしろ一人の人間としてお客様に向き合う姿勢(至誠)を問う書である。宿泊業やクレーム担当だけでなく、全ての企業・事業経営者・マネージャ、そして多くの人々を幸せに導く役目のはずの政治家に、是非とも読んで頂きたい。彼女のような人が増えるなら、この国はもっと幸せな国にされる筈だ。

のマ一働一の
一帯で一人
日本地日本支配

三輪康子
Yasuko Misu

怒鳴られたら、やさしさを一つでも多く返すんです!

モンスタースタッフ・グレイマーと闘い、荒上日本一のホテルをつつした「歌舞伎町のシャムヌ・ダルク」初の著書!

テレビドラマよりドラマチック!

きただより 50 弘前大学地域社会研究会 上村 康之
『 励みになった光星学院と能代商業の活躍 ~ 夏の高校野球選手権から ~ 』

東日本大震災被害者の励みにスポーツで元気を与えようと、プロ、アマ、高校生問わず競技者のがんばりが目をひき、さらにプロゴルファーの宮里藍選手、有村智恵選手ら東北出身でなくても東北に縁のある競技者の思いもマスコミを通して伝えられている。プロ野球東北楽天イーグルスの嶋基宏選手が開幕試合で宣言した「見せましょう。野球の底力を」は、印象に残る言葉であった。

今年の夏の高校野球選手権において、青森県代表の光星学院(八戸市)、秋田県代表の能代商業(能代市)の活躍は、暑い夏をさらに熱く、十分、東北に元気を与えてくれたものと思う。

光星学院は私立で、県外からの野球留学の生徒が多い学校である。これまで春の選抜、夏の選手権とともに5回の出場を誇り、夏は過去にベスト4、ベスト8が各1回ある。青森県内では青森山田高校(青森市)とほぼ毎年、甲子園出場を争い2強を形成してきた。今回、光星学院は2回戦から登場し勝ち進み、青森県勢として昭和44年(1967年)の三沢高校以来の決勝進出である。残念ながら決勝では、日大三高(西東京代表)に敗れたが、被災地の八戸に大きな励みとなった。

一方、能代商業は、能代市立の公立校であり、野球部の全員が能代市と周辺の山本郡のまさに地元の生徒である。昭和62年(1985年)と昨年と2度の夏の選手権出場はあるが、県内で決して強豪校ではなかった。少子化の進展により再来年には能代北高校との統合も控え、現校名で試合ができるのもあと2年であった。

また、秋田県勢は夏の甲子園で昨年まで13年連続初戦敗退という不名誉な記録を更新していた。このことが秋田県議会においても問題視され、今年1月に「秋田県高校野球強化プロジェクト」が立ち上がり、県外の甲子園優勝経験がある元監督、社会人野球強豪チームの元監督など6人のアドバイザーも名を連ねる。

そういった余計なプレッシャーもかかるなか、能代商業が秋田県勢として1回戦を14年ぶりの突破、2回戦も勝利した。3回戦の如水館(広島県代表)との試合は劣勢のなか守り抜き、延長10回に勝ち越したが逆転負けとなった。が、その戦いぶりは感銘を呼び、秋田県民の長年鬱積した溜飲を下げた。

最後に一点指摘しておきたい。このように両校は全く好対照の様相にあるが、「能代商業のように地元選手中心が高校野球の理想とし、逆に光星学院のように「野球留学生」の多さから×だ」という意見がよく聞かれる。地方における若年層の著しい減少の中、県外から親元を離れて来て、高校生の3年間を過ごした地域は、彼らにとっても第2の故郷となるであろう。地元出身か否かではなくもっと声援を送り支えてあげるべきである。と思うのだが、いかがであろうか。

八戸に凱旋した日に「昨年12月に部員3人が居酒屋で飲酒したことなどについて、部員のブログに書き込みがある」との指摘が青森県高野連にあり、せっかくの快挙が後味の悪いものになってしまったのは残念である。

『 祖父と孫 』
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

今回は去る9月5日に亡くなった私の祖父 川島源一について書いてみたいと思います。享年は85歳と平均寿命より長生きしたので大往生と言いたいところですが、この数年は痴呆が進行し、妻である祖母以外は誰も認識できない状態であり、初孫として溺愛してもらった私としても寂しい晩年だったように感じます。

簡単に祖父の紹介から。私の祖父は、終戦後に戦地から郷土石川県に帰還しました。当初は石川県庁に就職が決まっていたらしいのですが、戦時活動によって公職追放となってしまうその結果、仕事を転々としそして事業を立ち上げては潰しという連続だったそうです。そんな祖父が現在私の父が社長を務める鳳珠電気工事株式会社を立ち上げたのは昭和35年のことでした。日本が海外の先進国に追いつけ・追い越せと走り続けた高度経済成長期の入り口あたりでしょうか。裏日本・僻地と呼ばれる能登にも「電気」というエネルギーのインフラが整備されはじめ道路をはじめ公共施設や家庭にも電力エネルギーの恩恵をうけられる時代背景もまた追い風となり祖父、父と事業が継続する会社となったわけです。「能登の生活水準を向上させるための会社」という事業コンセプトです。

祖父に対する家族が持っていたイメージを一言であらわすならば「傲」でしょうか。それは創業者であり、家長としての立場から発せられる発言や行動が時折家族を傷つけ、混乱させることもしばしばありました。息子である私の父さえも一度、私の母とまだ3歳に満たなかった私を連れて出奔したこともありました。まあ結果的には父も祖父のもとに戻るわけなのですが。

しかし、そんな祖父にとって私は可愛くて仕方がない初孫であり、三代目でした。私の記憶でも、幼少のころは父・母より祖父といた時間が長ったような気がします。宇出津の町中を「世界一のかわいい孫」と呼んで連れまわしたそうです。しかし、私はそんな祖父の期待を裏切り、結果として電気工事業を継承しませんでした。理由は多々ありますが、やはり一番大きかったのは、「過疎化していく地域においてインフラ整備事業に依存したビジネスモデルの限界」ということです。つまりは、田舎の公共事業頼みの会社には興味がなかったと言ってしまうだけです。あと勝手に人生を決めるな!という若さならでの想いもありました。

しかし、あれから約20年の月日の中で、私人生も大きく能登やそこに住む家族に向けてきています。そして、将来的に会社を継ごうと考えています。単に、電気工事業を継ぐのではなく、「能登に住む人々を幸せにする会社」というコンセプトを継承したいと思います。私も少し長めの出奔だったのかもしれませんが。「じいちゃんあん時は継がんでごめんね。ほんでも、なんとかすっさかい見とって。」

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

- ポートランドの旅その3 - 静岡県職員 溝口 久

ここポートランド市の都市計画はどうなっているのか？ポートランドは全米で住んでみたい都市ベスト1をはじめ、Bestbicycling city、Bestwalking city、クリエイティブで意欲あふれる人が向かう街、女性が起業しやすい都市、人口一人当たりのレストラン数が全米NO.1、世界で最もビールの美味しい街トップ10、観光客に税負担が軽い都市全米NO.1（消費税0）等、街づくりへの称賛満載の都市だ。



市の人口は58万人、周辺を含めた都市圏人口は220万人。成長境界線による都市の成長管理政策とLRT（Light Rail Transit 路面電車）の公共交通の整備をきっかけとした市街地の再生・都心居住等を一体的に進めることで、ヒューマンスケールの街づくりで成功した都市だ。



市の中心には、LRTが走っており、無料で利用することができるし、自転車を積み込むこともできる。LRTは郊外からの高速運転により中心部への移動を容易にし、他の同規模都市に比べ自動車利用率が2割ほど低いという。



しかし、ポートランド市も、1960年代までは、米国の他の都市同様、モータリゼーションの進展に合わせて郊外の開発が進められたことで、都心部から郊外に人口が流出、空き店舗が増え、歴史的建造物が次々に壊され、空き地や駐車場に変わるといった都心部の空洞化・荒廃と都市のスプロール化が進んでいた。至る所に駐車場となったが空き地があり、そこは車で埋め尽くされているという殺伐とした状況にあった。ちなみにモーター都市のデトロイトは1950年185万人いた人口が91万人まで減少している。



1970年代に入ってこのような状況を変えようと、1972年にはダウンタウン再生のための計画が作成された。LRTは1986年に開業している。1990年代まで売春婦や麻薬の密売人が跋扈する危険な倉庫街と荒地が広がる都心のパール地区にLRTを通すこととなり、その整備に合せて、沿線の再開発を戦略的に進めてきた。その結果、今では、歴史を積み重ねたレンガ造りの倉庫を生かしたおしゃれなギャラリーやレストランが立ち並び、その上の階には都心居住用の住宅が整備されるなど、ポートランドで最もハイセンスで活気のあるスポットとして生まれ変わっている。

さらに、ダウンタウン中心部にあった駐車場を市民の憩いの広場パイオニ

ア・コートハウス・スクウェアとして再生するなど、歩行者中心のまちづくりが進められた。この広場の整備には、市民が広場に使用するレンガを購入する形で支援している。レンガ1つ1つには協力した市民の名前が刻まれ、広場に敷き詰められている。このこともあって“自分たちの広場”として市民に愛され賑わっている。



かつて出向していた豊岡村でつくった公民館も予算でまかなえない外構工事分を住民が汗流してつくったことで、とても地元で大切にされている。口だけ参加じゃない手足も参加がいい、時、場をそして目的を同じく汗を流すことがいい。

先のコートハウス・スクウェアの一角にすり鉢状のスペースがある。ガイドの谷田部さんがサークルの中心で声を出してみても誘う。芯に立って声を放つとこれが自分の声かと思うくらいボリュームあるものになる。他の公園にもあり、同様な現象が見られた。真似したいつくりだ。

さらに、ウィラメット川沿いに走っていた6車線の州間自動車道を撤去し、ウォーターフロント公園として再整備しているここでは毎年3月からクリスマス時期まで毎週末に“サターデイ・マーケット”と称する全米一を誇る蚤の市が立って大勢の人で賑わう。

公共交通の整備と合わせて進められたのが、植栽やパブリック・アートのあふれた、歩くのが楽しくなる幅広歩道の整備だ。木漏れ日が心地よい街路樹並木、各所に配置されたストリート・ファーニチャーなど、まち歩きが楽しめる仕掛けが随所にある。また、停留所の位置・屋根、街路樹、電柱、信号、駅標識のデザインや配置などが詳細にスタディーされている。これに先に紹介したZGF設計事務所が大きく関わっている。



ポートランドの都市計画のさらなる特徴は、都市の成長管理にある。ポートランド都市圏には、当該エリアの土地利用を含む長期ビジョンや総合計画の作成を担当している“メトロ”と呼ばれる地域政府が設けられ、都市化すべき地域と開発を抑制する地域とを明確に区分する都市成長境界線を定めている。日本の線引きは都市エリアと農振エリアの区分にあり、都市エリアの規模は人口フレーム、工業生産フレームにより理屈の上では定められている。でもポートランドはちょっと様子が違う。LRT等の公共交通の整備と都市成長境界線による規制を巧みに生かし、境界線内側の荒廃地の再生や土地の高度利用を進めることで、都市の成長管理を戦略的に進めている。日本は都市内部の区画整理や再開発を進めるが工学的な計画過ぎて、暮らすことに立脚していなかったり、老朽や荒廃を解消をせずに開発の容易な郊外に都市エリアの拡大を進めたことが、衰退気味の地方都市になっていく一因かなと思う。***

